

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04536

研究課題名（和文）保育者の実践を省察する力量形成過程とその要因の調査研究：園内研究会での語りの変容

研究課題名（英文）The process of developing the ability of teachers to reflect on their practice: Changes of teachers' narratives in lesson study in early childhood education and care facilities

研究代表者

岸野 麻衣 (Kishino, Mai)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・教授

研究者番号：80452126

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、保育実践について語り合う園内研究会について着目し、どのような場面を取り出してどのように語るのかという、保育者の「保育を見る目・語る力」に焦点を当て、保育者が実践を省察する力量を形成していく過程や背景を検討した。複数園での園内研究を長期にわたり追跡した事例研究を通して、保育者の力量は、園内外の学び合うコミュニティの多層に編まれた中で培われていくことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育者の省察的実践者としての力量は、個々人に属するものというよりは、園内の学び合うコミュニティの展開と連動していくものであり、またそれを支えるのは、一園を越えた多層的なネットワークであるという構造を明らかにすることができた。これは専門職として学び合うネットワークの新たな理論的枠組みを示すものであり、またこうした視点は、幼児教育研修の改革と推進に寄与するという点で社会的な意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This study focused on lesson study in early childhood education and care facilities, analyzed how teachers observe and discuss children's learning processes, and examined the process and background of how teachers develop the ability to reflect on their own practice. Through a longitudinal case study of lesson study in multiple facilities, it was suggested that teachers' abilities as reflective practitioners were cultivated in multi-layered learning communities both inside and outside the facilities.

研究分野：幼児教育

キーワード：実践の省察 保育者の専門性 園内研究会 コミュニティ ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

(1) 保育実践について同僚と語り合い振り返る場の重要性と困難

幼稚園・保育所・認定こども園といった幼児教育の現場においては、日々子どもや保護者とかかわっていく保育実践について、記録をもとに同僚と共に振り返り、専門性を高めていくことが重要である（文部科学省，2008；厚生労働省，2008）。

その方法の一つとして、多くの園で「保育カンファレンス」がなされている。保育カンファレンスとは、医師や看護師などの専門家が行う臨床事例についての協議を、保育に適用したものである。保育カンファレンスが有効に進むためには、様々な条件が挙げられている。例えば森上（1996）は、第1に「正解」を求めず自由に発言すること、第2に建前ではなく「本音」で話し合うこと、第3に「指導」の場ではなく参加者それぞれが自分の問題として考える場となること、第4に批判や論争をしないこと、第5に互いの成長を支え育ちあうことであるという。また田代（1995）は保育カンファレンスが機能するために、第1に「発言の対等性」、第2に「話の具体性」、第3に「実践との循環性」の3条件を提示している。

しかし、実際にはこれらの条件を保つことは難しい状況も示されている。例えば中坪ら（2012）は、保育カンファレンスにおける保育者の談話スタイルとその規定要因を検討し、同僚のこたばの相互共有が高いスタイルと低いスタイルとが見られることを示している。発話の対等性の問題も指摘されており（香曾我部，2015）、最終的に権威や経験の豊富な参加者の意見が採用される状態にもなりがちだともいわれている（松井，2009）。

このような困難に対して、先行研究では、保育者同士が語り合う場を作り出すための方法が開発されてきた。例えば、子どもの見方や保育者の行為の判断について振り返ったことや、子どもの育ちや経験に関して理解したことについて、保育者が記述したものを同僚と共に、KJ法を用いて分類する方法である（中坪，2015）。また香曾我部（2015）も、過去の実践を対象として振り返るだけでなく、近い未来の保育実践における保育者の援助や環境構成を語り合うことの有効性を指摘し、TEMと呼ばれる時間軸にそった分類法による展望共有型の保育カンファレンスを提案している。しかし、語り合う際の分類法を変えるだけで困難が克服できるとは考えにくい。

(2) 保育実践を語り合う場における省察の質と学び合うコミュニティの必要

著者はこれまで小学校をフィールドに、教師の授業づくりや教師の専門性の向上について研究を進めてきた。その成果として、教師の専門性の向上には、個人的な要因だけでなく、様々な社会的・歴史的要因が絡まっていること（岸野・無藤，2006）、とりわけ学校において同僚と学び合うコミュニティの中で様々な形で省察しながら、授業づくり等の力量が形成されていくこと（岸野，2012；岸野，2014；岸野，2015）を明らかにしてきた。

これらを踏まえて、近年では小学校のみならず幼稚園・保育所等においても、お互いの保育を見合い、それを検討しあう園内研究会に参加するようになり、そこでの相互作用を分析し始め（岸野，2015）、本研究の着想に至った。加えて、福井県幼児教育支援センターと協働で、園種の枠を越えて、幼稚園・保育所・認定こども園の保育者が、遊びの中での子どもの学びを記述した事例を持ち寄り、グループで検討しあう長期継続型の研修を企画・運営して実践的に研究を進めつつあり（岸野，2016）、多様な園の実態も見えてきた。

こうした背景を踏まえると、保育者同士で対等に保育実践について語り合うためには、語り合う際の分類法を工夫するだけでは不十分であり、そもそも保育場面から何をどう見て取り出してどう語るのか、実践の省察を質の高いものにしていくことが必要であると考えられる。それには、保育者個人のみならず、園で学び合うコミュニティを形成していく必要があり、園を取り巻く社会・文化・制度的文脈という、より広い視点でこの問題を考える必要があるともいえる。

2. 研究の目的とアプローチ

幼児教育現場で行われている保育実践について語り合う園内研究会において、保育者が対等に実践を語り合い、振り返り、実践力を高めていくにはどうしたらいいのだろうか。ここまで述べてきたように、そこでは、そもそも保育場面から何をどう見て取り出してどう語るのかという実践を省察する力量が問題となる。そこで本研究ではこれを「保育を見る目・語る力」として概念化し、園で同僚と学び合うコミュニティや、園を取り巻く社会・文化・制度的文脈を背景に、どのように園内研究会が行われ、保育者たちが力量を形成していくのか、その過程と要因を明らかにすることを目的とした。

具体的には、公立・私立の複数の幼稚園・保育所・認定こども園において、保育を見合ったり保育の事例を読み合ったりして語り合う園内研究会に参加し、そこでの個々の保育者の語りを収集し、継続していく過程で、保育を見る目・語る力がどのように変容していくのかを検討する。同時に、それぞれの園が置かれている社会・文化・制度的文脈について、管理職や研究主任、教育委員会等への聴き取りにより検討する。これらを通して、どのような社会・文化・制度的文脈の中で園内研究会が行われ、そこでの保育者たちの語りやどのように変容し、保育を見る目・語る力という実践を省察する力量がどのように形成されていくのかを明らかにすることとした。

3. 研究の方法

保育を見合ったり事例を読み合ったりする園内研究会において、各園の保育者は保育を見る目・語る力をどのように発揮して高めていくのかという力量形成過程と、その背景では園内研究会の進め方等にどのように工夫が加えられ、どのように変容したのか、長期的な展開を検討していくため、できるだけ対象の園を継続的に追いかけて、事例研究を行った。

対象園は、多様な社会・文化・制度的文脈を検討できるように、国立・公立・私立の幼稚園・保育所・認定こども園がなるべく含まれるようにし、年間3～5回程度の継続的な園内研究会が行われている園とした。

各園で継続的に行われる保育を見合ったり事例を読み合ったりする園内研究会において、毎回参加し、参与しながら観察を行った。具体的には、参加者の一員として、著者も保育実践について語りながら、保育者たちが保育実践について語る様子を記録した。また各園の社会・文化・制度的文脈について、管理職や研究主任、教育委員会関係者等に聴き取りを行った。園の保育場面についても観察を行い、ビデオカメラにより記録した。これらによって得られたデータを整理し、語りの変容に見られる力量形成過程と、その要因となりうる社会・文化・制度的文脈について、各園の特徴を比較検討した。

4. 研究成果

(1) 保育を見る目・語る力と社会・文化・制度的文脈に関する園による多様性

各園で行われている園内研究会において、保育者の力量形成過程と、その背景について、各園の特徴を洗い出し、比較検討したところ、次のような結果が得られた。

外部の助言者や他園の保育者に向けた公開保育研究会が定期的に行われ、隔年で実践記録を掲載した研究紀要を出す園では、他校種からの人事異動がありながらも、枠組みに支えられて、自身の保育を語る場面において、遊びの中の学びとそのための環境構成に焦点づけられる傾向があった。

一方で、こうした枠組みがない中で、保育を見合ったりエピソードを語ったりすることを始めた園においては、最初のうちは、目にした子どもの様子を出来事として語ることや外部からの助言者の言葉を受け取ることにとどまっていた。しかし、会の形式も変えながら回数を重ねていく中で、見たことの報告にとどまらず、自身の保育とも照らし合わせながら自分の見方を言語化し、捉え方を吟味していくことが見られるようになっていった。また、特定のクラスを複数の保育者で見たり語り合う研究会を行っていた園では、見る遊びの種類や子どもをある程度固定し、同じ遊びや子どもを見た少人数の保育者同士で語り合うようにしており、それは共同で子どもの思考を追いかけて直すことにつながっていた。こうした枠づけのない園では、それぞれが見たことをトピック的に語るにとどまり、解釈を語り合う絡み合いは起きにくかった。

またこれらの背景では、力量ある管理職の異動によって却って保育者の自律性と団結が発揮されたり、臨時任用職員モチベーションや関与が園によって異なり、参加の仕方を配慮したことで積極的な参加が得られたり、状況が与える影響もさまざまに見られた。

研究会での語りにおいて、どのような場面を取り上げてどのように語るかということは、園の文脈と密接に関連していることが示唆された。

(2) 園内研究会の変遷とそこでの保育を見る目・語る力の変容との関連

園を取り巻く状況や文脈が変化していく中で、園内研究会がどのように変遷し、それは保育者の語りの変容とどのような関連があるのか、ある公立A幼稚園における園内研究会での保育者の語りに焦点を当てて、分析を行った。

報告の場としての研究会

最初の研究会は広いホールで、研究保育の担任がこれまでの経過と当日の思いを語ったあと、参観者が付箋に書いた「子どもの姿・良かったところ・改善するといいいところ」を模造紙に貼り、順に報告するという流れで行われた。副園長のようなベテラン教諭は豊かな語りをする一方、それ以外の教師は見た出来事を順に報告することが続き、丁寧に事実を語り認識を問いただすということが難しい様子だった。その背景には、研究会の場の意味が不透明で、参観の報告が目的化していたり、司会者の役割がまとめることとなっていたりしたことがうかがえた。

共感的に語り合う場へ

しばらくホールでグループに分かれて行っていたが、冬の寒さと距離の遠さ、声の拡散を解消するため、小さな会議室で行うようになった。2,3のグループに分かれて模造紙を囲み、付箋を持ち寄りながら、特定の場面の子どもの姿と参観者や保育者の捉え、参観者自身ならどうかという判断が語り合われるようになっていった。やり取りの中で、「昨日は...」というプロセスが語られたり、自分なら...という「私」がその根拠と共に照らし出されたりするようになっていった。

プロセスを探る場としての2年目

副園長の転出、初任教諭の転入のほか、若干の人事異動があった。次年度に4県地区の研究発表が決まり、その準備に向かいつつ、前年度と同様に研究保育とグループでの語り合いが行われた。当初、初任教諭は「間違っているかも...」と戸惑いを示しながら出来事の報告を中心に語っていたが、中堅教諭が「大丈夫」と声をかけたり、他の教諭が具体化する問い

を投げたりし、温かく聴く様子が見られた。中堅教諭がより丁寧に個々の子どもの思考や行為のプロセスを探って語り、自分の捉えや評価を語るようになっており、立ち位置が、語り合いをリードする立場へ変わったことがうかがえた。

保育も研究会も協働探究の3年目

研究発表を秋に控え、考察の手がかりとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」についての理解を進めながら、研究保育を進めていった。2人の教諭の異動と同時に、この地域では3年周期で人事異動があることを踏まえて世代交代のためか、研究主任も代替わりした。研究会では、中堅教諭が率先して語り、特定の子どもの何をどうしていったかのプロセスと周囲の子どもの動き、そしてこれからの子どもの育ちや遊びの発展のプロセスの想定が語られた。中堅教諭が園での経験を重ねてきて、その時期どんな遊びが展開するか、どのような育ちが見られるか、見通しが持てるようになり、保育について探究を深められるようになったこと、また研究会の持ち方そのものについても、教師みんなで相談して「10の姿」の視点を使うようにするなど、協働での探究が進んできたことがうかがえた。

園内研究会の場の変容と保育者の語りとの関連

この事例においては、研究会の場そのものが変容している。場所（大きなホールから小さな会議室へ）、スタイル（全体会からグループ協議へ）、対話構造（報告と司会者のまとめからやり取りを通した対話へ）、雰囲気（形式的な報告から共感的に語り合う風土へ）、人事異動（メンバーの立ち位置の変化）、研究主任の代替わり（主任の決定から協働探究へ）などである。また研究発表の指定や人事異動の周期など、この園や地域特有の事柄も大きく作用していた。保育者の語りは、個々人の力量によるだけではなく、社会的・文化的・歴史的な要因が絡み合っていて連動していることがうかがえる。園内研究会が語りの変容を支えるものとなるには、どのような場所で、どんなメンバー構成で、どんな対話や雰囲気を作り出すのか、園の置かれている状況を踏まえて、学び合うコミュニティそのものを耕していくことが重要であることが示唆された。

（3）保育を見る目・語る力を培う基盤となる実践記録と学び合うコミュニティのプロセス

園内研究会において保育を見合うことが保育を見る目・語る力を培っていくと同時に、それを持続・発展させていく上では学び合うコミュニティを耕していくことが重要である。それは一園だけでは異動によって崩れてしまうことも少なくない。それに対して、園を結ぶコミュニティを形成し、多層的に編んでいくと同時に、時間を越えて共有できる実践記録を綴り読み合うことで保育実践の質を練り上げていくことが可能となる。そうした取組のプロセスについて、ある地域の公立保育所のコミュニティの事例分析を行った。

対象の概要

B町の4つの公立保育所においては、各園から1、2名のメンバーで結成された実践研究グループ「ぴっか」が形成されていた。名づけには、「子どもがひらめいた時の様子」を音の響きで連想させ、その一人ひとりのひらめきに寄り添っていける存在でありたい」という思いが込められている。公開保育研修会や各園の保育実践研究についての企画運営の主体として機能している。著者は、助言者として研究会へ参加し、企画運営を支援してきた。

研究会の変容

はじめは、実践研究グループが各園の保育を見て各園の保育者と感想を言っていくという、保育の見合いと感想の共有が行われた。やがて、一園に絞って実践研究グループを核としながら保育改革を推進しつつ、各園の事例共有を行うようにし、全体での報告や一人一言の発言に終わらないよう、小グループに分かれて、より省察的に語り合う場を組織するようになった。3年にわたるこうした基盤をもとに、実践記録を綴る取組を進め、各園で保育を見ての語り合いに加えて綴った実践記録を読み合い語り合う研究会が導入されていった。

コミュニティの変遷と基盤としての実践記録

これらのプロセスにおいては、保育を見合い語り合う風土を拓けていくと共に、実践を書いて検討することが日常化されていくように働きかけられ、保育者それぞれが実践を省察し語り合い高めていく道具として実践記録が重要な役割を果たすように価値づけられていた。その背景では、各園の保育改革を推進するぴっかというコーディネータのコミュニティが基盤となり、一園に閉じずにネットワークを結びながら実践を発展させていく地域的な文脈が重要な役割を担っていることが示唆された。

（4）保育を見る目・語る力を培う園内研究会の持続の要因

公立園においては保育者の異動により、それまでの研究会の持続が困難になる状況がしばしば起こる。また新型コロナウイルスのパンデミックにより、園内研究会の様相も一変せざるを得ない状況にも置かれた。そこで、こうした困難に直面する中で、保育を見る目・語る力が培われるような園内研究会を持続するための要因を探るため、公立3園を取り上げ、各園の組織的状況、園内研究会の場や形式、語りの特徴について事例分析を行った。

公立B保育所

2020・2021年度で管理職の異動や保育者の大きな異動があった。町として連携しながら保育研究を進めており、保育記録の組織化を継続しているほか、園内で参観し合う研究会を行いつつ、各園の研究推進メンバーが集まって協議会を行った。小規模B2園は推進メンバ

一が保育の中核となり、積極的に他の保育者に声をかけながらクラスの枠を越えて保育が進められている。一方大規模 B1 園はこれまでの保育改革が元に戻る傾向が見られ、研究推進メンバーと管理職の思いにも若干のずれが生じてきた。協議会では各園の報告のみならず迷いや困難も率直に語り合う様子が見られた。

公立 C 幼稚園

2020 年度に園長の異動、2021 年度に研究主任の異動があり、在園年数の長くなった若手保育者が研究会の司会をするようになり、研究会場所は会議室からホールとなった。各クラス年 1 回研究保育を行い、参観しあい語り合う研究会を行っている。以前は 2、3 人のグループに分かれ、特定の遊びや子どもについて前半・後半で分担して参観し、子どもの思考や行動を付箋に書き、模造紙に経過を図にして語り合っていたのが、子どもの主体を大事にするために遊びの場を多様に開いたこともあってか、参観は特定化されなくなった。グループも 4、5 人で多様な遊びを見たメンバーで語ることとなり、参観した子どもの姿については、具体的にそのプロセスを捉え語る保育者もいるが、深めにくく、図も形骸化した。質問もあまり出ず、予定より早く終わり、淡泊となった。

国立 D 幼稚園

2021 年度に園長の異動、2020・2021 年度で 2、3 名のクラス担任の異動があったが、研究主任は替わらず研究推進部として 3 人体制で組織化された。月に一度、参観し合うことも取り入れながら、撮った写真をもとに正規教員 8 名で語り合う研究会を会議室で行っている。その他、保護者向けにアプリでの発信や研究紀要への事例執筆、小中との合同研究会での報告等も行われている。はじめは各自の報告が主となったが、会を重ねるにつれ迷いを率直に出し合い課題を語り合うようになってきた。

園内研究会の持続に向けたコーディネートの重要性

各園とも異動やコロナ禍によりさまざまな困難に直面していたが、研究会の持続には、研究会の形式よりもコーディネートの在り方や管理職との関係性が大きな要因となっていたことが示唆された。個々の保育者が園内研究会の中で子どもの姿を具体的にプロセスで捉え、保育の在り方を掘り下げて語り合うことを持続させるには、園内研究会をコーディネートする保育者の役割意識と動き、管理職との関係性が関連しており、園内の保育者の力量形成を支えるコーディネーションについて協働体制を構築することが重要といえる。

(5) 保育を見る目・語る力を支える多層構造のネットワーク

保育を見る目・語る力の力量形成を支える園内研究会のコーディネーションと協働体制の構築にあたっては、ここまで検討してきたように、一園だけで行っていくことは極めて難しい。園と園がつながって実践と省察を行っていく学び合うコミュニティが鍵となり、そうした園や市町を越えたネットワークの形成が重要となる。どのようなネットワークが支えとなるのか、B 町立保育所の事例の分析を通して明らかにした。

町を越えたコミュニティの支え

B 町立保育所のように園がつながり学び合うことを県の幼児教育センターとしても重点を置き、他の市町においても同様の構造ができるよう、市町ごとの幼児教育アドバイザーの養成と各園での園内リーダーの養成を行ってきた。B 町立保育所からも、毎年 1 名ずつがこれらの研修を受講しており、各園には着実に、園内で子どもの学びを綴り語り合いながら学び合っていくことへの理解が高まることにつながった。また市町幼児教育アドバイザーは他の市町の幼児教育アドバイザーと、お互いの市町の幼児教育の質の向上について学び合うこととなった。このように市町同士もつながり、大きな方向を共有していくことが、B 町立保育所の学び合うコミュニティの大きな支えともなっていたといえる。

保育を見る目・語る力の力量形成を支える多層的に構造化された省察的機構

園内のコミュニティ、市町内で園をつなぐコミュニティ、各市町のコーディネータをつなぐコミュニティが多重に編まれてきた背景で、それらを支える県と大学の担当者もまた、これらを協働でマネジメントするコミュニティとして機能していた。

子どもたちの探究と保育者の探究はフラクタルなものである。子どもたちも保育者も、個・グループ・クラスや学年・異世代・異校種等での探究が絡められてこそ、探究は深まっていく。しかしともするとこれらはバラバラになり、目先の探究にしか目が向かなくなる。実際には多系、多層に張り巡らされている階層を行き来するようマネジメントすることが探究を深めていく上で重要である。そして、境界を越えるとき、単に「外部」として関わるのではなく、互いの探究を支え合う関係性が極めて重要となる。そしてそこには世代のサイクルも有効に機能しうる。保育者の、保育の質の向上に向けた探究は、このように、園内・市町・県・大学が多重に連携し、連動しあいながら発展していくことが明らかになった。

そしてその支えとなり、また探究の質をより高度化していく手がかかりとなるのが、「記録」である。取り組んできた保育の中で見えてきた子どもの学びのプロセスを実践記録として綴り、読み合うことを重ね、質の高い記録が蓄積され共有されていくことは、着実にコミュニティ全体の探究の質を高めることにつながる。保育者という省察的実践者の力量形成においては、このように、記録を基盤にしながらい時間をかけて編まれていく省察的機構が大きな支えとなることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岸野麻衣	4. 巻 2
2. 論文標題 保育者が学び合うコミュニティを培う省察的機構・組織の構築過程： 幼児教育支援センターにおける研修のマネジメントの省察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 省察的実践研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸野麻衣	4. 巻 12
2. 論文標題 幼児教育における専門職学習コミュニティの構築：園における「保育実践研究」のマネジメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師教育研究（福井大学）	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸野麻衣	4. 巻 10
2. 論文標題 傍観者から協働探究者へ：教育実践のフィールドに関わる研究者としての省察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 111-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岸野麻衣
2. 発表標題 保育者の力量形成を支える園内研究会を持続させる要因：複数園での園内研究会への参画の省察を通して
3. 学会等名 発達心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸野麻衣
2. 発表標題 保育所における実践し省察するコミュニティの形成：町の4保育所における4年間のプロセス
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回大会 ポスター発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸野麻衣
2. 発表標題 保育者の専門性を高める研修をいかに組織するか：福井県幼児教育支援センターにおける研修の発展過程の分析
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回大会 ポスター発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岸野麻衣
2. 発表標題 園内研究会の「状況」はいかにして教師の成長につながるのか
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回大会 自主シンポジウム「教育心理学からみた教師の成長と変容」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岸野麻衣
2. 発表標題 保育を見合う研究会の変遷プロセス ～複数園の置かれた状況の比較～
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 木村優・岸野麻衣編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 296
3. 書名 授業研究：実践を変え、理論を革新する（ワードマップ）	

1. 著者名 有馬道久・大久保智生・岡田涼・宮前淳子編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 180
3. 書名 学校に還す心理学：研究知見からともに考える教師の仕事	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------